



バッハの森通信

第 154 号
2022 年
1 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

新しい歌を歌おう

解放される喜びを先取して

新年おめでとうございます。

今年は「新しい年に新しい歌を歌いましょう」と年賀状でご挨拶しました。そこにイラストのように付け加えたドイツ語とラテン語は、「主に歌え、新しい歌を。主に歌え、全地よ」という詩篇 96 篇 1 節の言葉です。敢えて出典を付記しなかったのは、どのような歌が皆さん一人一人の「新しい歌」なのか、自由に考えていただきたかったからです。

* * *

詩篇の他に「主に歌え、新しい歌を」と勧めたのは第二イザヤです。突然、第二イザヤと言われても誰のことか分からないという方は、ヘンデルの「メサイア」の、あの有名な最初のテノールのレチタティーヴォを思い出してください。

“Comfort ye my people, saith your God”

「慰めよ、わが民を、と汝らの神が言われる」。この慰めの言葉は、イザヤ書 40 章以下の預言詩集を残した第二イザヤの最初の言葉です。

紀元前 6 世紀初めに、ダビデ王以来 400 年も守り続けてきたエルサレムから、遠くバビロンに捕囚されて 50 年近くたち、もはや故国に帰る望みも消えそうになっていた人々に、犯した罪のため受けた罰をあなたたちは十分に償った。今は許されるときだ、と主の慰めの言葉を伝え、希望をもって生きることを教えた預言者です。

続いて第二イザヤは次のような主の言葉を伝えます。「私 (=主) は天地を創造して人々に息を与え霊を授けたが、特にお前たちイスラエルを選んで契約

を結び、諸国民の光とした。見よ、これはすべて実現したことだ。これに対してこれから起こる新しいことを、そのことが起こる前にお前たちに告げよう」。預言者は、この主の言葉に応答して「主に歌え、新しい歌を」と民に勧めたのです。

文脈から、この「新しい歌」が、バビロン捕囚から解放してくださるに違いない主を讃美する歌であることが分かります。「新しい歌」の「新しい」とは、これから起こる新しいこと、すなわち、主の救いに答えることを意味しています。現在はまだ捕囚の身だが、必ず主が救い出してくださることを信じて、主を誉め称える歌を歌え、というのです。

* * *

もう 3 年間も世界中の人たちが、コロナ感染症にびくびくしながら生きてきました。世界の諸国と比べると日本の感染者数は桁違いに少数ですが、日本でも今は、オミクロン株によるこれまで経験したことのないスピードで増加する第 6 波の感染者の増加を、必死で食い止めています。いずれ第 6 波は収まるでしょうが、その後で新しい変異株が発生し、第 7 波が来ないとは誰にも断言できない状況です。勿論、新薬の開発などによってコロナを克服する科学的手段の追求は大切なことです。しかし同時に、感染防止のため、たとえ友人でも家族でも、他人と接触しない生活方法が教えられているため、孤独に悩む人が増えていることも忘れてはいけません。その結果、無関係の、それも多数の他人を巻き添えに自殺する人が次々と現れます。

人類はコロナというバビロンに捕囚されています。捕囚から解放されることを諦めていた人々に、第二イザヤは、主の救いを信じて「新しい歌」を歌うことを勧めました。私たちは、今、自分に命が与えられている事実を受け止め、コロナ禍から解放される喜びを先取りして、「新しい歌」を歌おうではありませんか。

(石田友雄)

クリスマスの喜び

自分の犠牲によって地上に 神の王国を建てる感動の連鎖

*このメディタツィオは、2021年12月12日に開かれた
クリスマス・コンサートで朗読されました。

ルカの降誕物語

新約聖書は、二つの降誕物語を伝えます。ルカによる福音書によると、ガリラヤのナザレに住む処女マリアは、天使ガブリエルから受胎告知を受けました。その後、彼女の許婚のヨセフは、聖霊によって身重になったマリアを伴って、ローマ皇帝の勅令に従い戸口調査の登録をするため、ユダヤのベツレヘムというダビデの町に来ました。ダビデ家の一族だったからです。

他方、宿屋が満員で泊まる所がなかったため、この間に月が満ちたマリアは家畜小屋で男の子を生み、飼料桶に寝かせました。その夜、ベツレヘム郊外の野原で羊の群れの番をしていた羊飼いたちに天使が現れ、救い主がダビデの町で生まれたことを告げると、天の大軍が現れ、神を讃美して歌いました。「グローリア（栄光）、いと高きところにいます神にあれ、地には平和、御意志(ミコロ)にかなう人々にあれ」。その40日後、清めの期間が終わると、ヨセフとマリアは幼な児イエスを主に捧げるためエルサレム神殿に詣で、律法に従って犠牲を捧げると、ガリラヤのナザレに戻りました。

マタイの降誕物語

ルカの物語と全く違う降誕物語をマタイによる福音書が伝えます。先ずアブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロン捕囚まで14代、バビロン捕囚からキリストまで14代数える系図により、マリアの許婚のヨセフがダビデ家の子孫であることを伝えます。その後で夢に現れた天使から、ヨセフは、マリアが聖霊によって身重になったこと、彼女が生む子は、かつて預言者イザヤが預言した主の約束の成就を示す男の子であり、その名は「神が私たちと共におられる」という意味のヘブライ語「インマヌエル」であると告げられました。この物語には、その後に長い続きがあります。

東の国から来たマギとヘロデの幼児虐殺

ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでイエスがお生まれになったとき、と物語は始まります。東の国から占星術の博士たちマギがエルサレムに来て、「ユダヤ人の王がお生まれになったことを知らせる星を発見したので、その方を拝みに来ました。その方はどこにおられますか」と聞いてきました。新しい王に王位を奪われることを恐れたヘロデは、学者たちを集めて、新しい王はどこで生まれることになっているのか、と問いだしました。すると彼らは「ベツレヘムで生まれると預言されている」と答えたので、ヘロデは、私も拝みに行くから、その子のことを調べたら知らせてくれ、とマギに命じました。

そこで、彼らは東の国で発見した星に導かれてベツレヘムに行き、マリアと共にいる幼な児を見つけると、携えてきた黄金、乳香、没薬を捧げて拝みました。捧げ物が3種類であったことから、後にマギは、白人、アジア人、黒人のカスパル、バルタザール、メルキオールという老人、壮年、青年で、世界の人々と各年代を代表する3人であったという伝説が生まれました。彼らは、ヘロデのところへ帰るといふ夢のお告げを受けたので、別の道を通って東の国に帰りました。

マギが帰って行くと、天使が夢でヨセフに現れ、幼な児とマリアを連れてエジプトへ逃げよ、ヘロデが幼な児を探し出して殺そうとしていると告げたので、その夜のうちに彼らはエジプトへ逃げました。他方、博士たちに騙されたと知ったヘロデは激しく怒り、ベツレヘムとその近郊にいた二歳以下の男の子を皆殺しにさせました。その後、ヘロデが死んだことを知らされたヨセフは、幼な児とマリアを連れて戻って来ましたが、ヘロデの息子がユダヤを治めていたので、ユダヤから遠いガリラヤ地方に行き、ナザレという町に住み着きました。

二つの降誕物語に共通する信仰

このように、ルカとマタイが伝える降誕物語は全く別の物語です。片やガリラヤのナザレに住んでいたマリアとヨセフが、住民登録のためユダヤのベツレヘムにやって来ましたが、もう一つのお話しでは、元々ベツレヘムに住んでいたヨセフとマリアが、ヘロデ王から逃げてエジプトに行き、ヘロデの死後戻ってきました。しかしヘロデ家の支配が続くユダヤを避けてたどり着いたのがガリラヤのナザレだったと言うのです。

紀元30年頃に起こったイエス・キリストの受難

から約 70 年後、紀元 1 世紀末までに編纂されたと考えられる 2 冊の福音書が、これほど違う降誕物語を伝えているのは、ナザレのイエスがキリスト、すなわちメシアであったと信じる人々の群れが、東地中海地方を中心にローマ帝国が支配する各地に広がり、各地方の信徒たちが独自の活動をしていたことを示していると考えられます。それと同時に、細部に関してこれほど違う二つの降誕物語に、完全に一致する信仰が伝えられていることに注目しなければなりません。これは、彼ら初代キリスト教徒たちが根本的に同一の信仰に連らなっていたことを示しています。まず、後にキリスト教徒が「旧約聖書」と呼ぶ「聖書」は、ナザレのイエスはヘブライ語でメシア、ギリシャ語でキリストであることを伝える神の言葉であるという信仰です。降誕物語と関連する箇所として、マタイによる福音書がまず伝えるイエスの系図が、「アブラハムの子」「ダビデの子」で始まることに注目してください。神がアブラハムとダビデに、子孫から救い主が生まれると約束したと聖書に書いてあるが、この約束通り生まれた救い主がイエス・キリストだということです。またイエスがダビデ家の子孫であることを、先ずヨセフについて語り、次いでダビデの出身地ベツレヘムでイエスが生まれたことによって証明します。

天から降ったイエス・キリスト

次に一致している信仰は、イエス・キリストが天からこの世に降って来た方であるという説明です。マリアが聖霊によって身籠もったという報告が、この信仰をはっきり表しています。この信仰は、ナザレのイエスの教えと行動に深く感銘を受けた弟子たちの間で始まったと考えられます。イエスの運動目標は、神の王国、すなわち、天の王国を地上に実現することでした。ですからイエスは、「主の祈り」で、「神の王国、御国を地上に来たせたまえ」或いは「神の御意志（ミココ）が天の王国において行われているように、地上においても実現させてください」と祈り、「お前たちの父が慈しみ深いように、お前たちも慈しみ深い者になれ」と教えました。しかもイエスは、病人を癒やし、社会的に疎外されている人々を訪ね、悲しんでいる人たちを慰めて元気づけ、本当に「慈しみ深い神が支配する世界」をこの世で実現してみせたので、弟子たちが、この方はこの世の人ではない、天から降ってこられた方に違いない、と思うようになったのは不思議ではありません。このような弟子たちの驚きが数世代にもわたって語り伝えられていくうちに、東の国のマギが救い主の降誕を知らせる星を発見して拝みに来たという伝説や、

イエス降誕の夜に天使の大軍が「グローリア」を歌ったと語られるようになったのでしょうか。どちらも「天」の祝福を語っています。同時に、「地」すなわち「この世」が冷たく、それどころか敵意をもって「天」から降誕した方を迎えたことが語られます。ルカでは泊まる所が与られなかったマリアは、家畜小屋でイエスを産まなければなりませんでしたが、マタイでは、幼な児イエスはヘロデに命を狙われて父母と共にエジプトに逃亡したのです。

二つの降誕物語に共通するメッセージ

ではマタイとルカの降誕物語は、私たちに何を伝えようとしているのでしょうか。よく読んでみると、マタイとルカが、これほど違う降誕物語を語りながら、完全に共通するメッセージを伝えていることに気づきます。マタイは、イエス・キリストは「インマヌエル」、解釈すれば「天から降って来て私たちと一緒にいてくださる神様」であるという一言にそのメッセージを籠めていると考えられます。他方、ルカは天使の讃美の歌、「グローリア」の 2 行目によって、より詳しく私たちと一緒にいてくださる方について語ります。すなわち、「地には平和、御意志（ミココ）に適う人々にあれ」と語りますが、この言葉を解釈すると、彼は「地上に住む私たちを祝福するために、いと高い天から降って来て平和を実現してください」と読めます。補足すれば、「キリエ」と「グローリア」で始まるミサが、「アニユス・デイ」すなわち犠牲になった「神の小羊」に「ドナ・ノービス・パチェム」「私たちに平和を与えてください」と祈って終わることを思い出してください。彼は、平和を他人の犠牲ではなく、自分の犠牲によって実現した方なのです。

それから 2000 年、残念ながら人間の営みは変わりません。コロナというパンデミックや地球の温暖化現象などが、全人類は運命共同体であることをはっきり証明したにもかかわらず、人々は、いまだに自分だけ生き残ることしか考えず、強い者勝ちの生き方を変えようとはしません。しかし、明らかにこれは人類が自滅に向かう道なのです。

このような時代に生きている私たちは、神の王国を地上に実現しようとする夢を追い求めた人の生き方に感動して、それを伝えてくれた人たちから多くを学ぶことができるのではないのでしょうか。「インマヌエル」「神様が私たちと一緒にいてくださるように」という彼らの願いに籠められた平和な世界の実現は、まさに私たちが求めていることではありませんか。

（石田友雄）

バッハの森のクリスマス

「クリスマス・コンサート」(12月12日)
「クリスマスの音楽会」と「祝会」(12月18日)
「再生CD鑑賞会：一子先生と奏でたクリスマス」(2022年1月8日)



幸せな充実感を 分かち合えたコンサート

2021年も、バッハの森で豊かで幸せなクリスマスを過ごすことができました。バッハの森での学びは、いつも楽しく充実したのですが、やはりクリスマスは特別です。下火になっていたとはいえ、ウィズ・コロナの状況が続く中、感染予防対策をしっかりと施したうえ、例年のように「クリスマス・コンサート」と「クリスマスの音楽会」が開かれました。

「クリスマス・コンサート」では、私もクワイアのメンバーとして演奏したJ. C. F. フィッシャーの「さあ来てください、諸国の人々の救い主よ」に基づく「ミサ」と、J. S. バッハのカンタータ「最愛のインマヌエルよ、敬虔な者たちの君よ」が特に心に残りました。ミサでは定型の歌詞を歌いながらも、引用された旋律からアドヴェント（降誕を待つ季節）を感じることができ、積み重ねられた文化の厚みに思いを馳せました。その後にカンタータを歌うと、「インマヌエル、すなわち、主と共にある」ことを望む思いがますます鮮明に感じることができました。クワイアと一緒に演奏してくださった鈴木由帆さんのオルガンもとても素晴らしく、共に演奏できることを幸せに思いました。どちらも難しい曲でしたが、充実感を覚えながら歌うことができました。

このコンサートには私の同僚が来てくださり、後で「クリスマスのイメージが、ただきらびやかで楽しいものではなく、深みのあるものに変化しました」という感想を聞かさせていただきました。音楽を学んで来

た方なので、これまで多くのクリスマスの音楽を演奏して、クリスマスはイエス・キリストの誕生日のお祝いという認識はあったけれど、聖書のお話まで遡って考えたことはなかったそうです。「知らないことばかりだった」と話していました。プログラムに友雄先生のメディアツィオが掲載されていたので、「耳で聞くだけではなく、文字で読むことで大いに理解が深まりました」と喜んでいました。他にも「後ろからハンドベルが聞こえ、前では素晴らしいオルガンが鳴り響き、奏楽堂全体が音楽で満たされている中で、自分も会衆として一緒に歌えるのがとても楽しかった」ともおっしゃっていました。このように、バッハの森のコンサートに初めて参加なさった方にも、バッハ森の特別な魅力を感じていただけたコンサートだったことを知らされ、とても嬉しく思いました。

(岩淵倫子)

子どもたちと 仲間になった音楽会

満員になった「クリスマスの音楽会」では、ハンドベル、オルガン、器楽アンサンブルなどの魅力溢れる音楽に加えて、スライド劇「アマールと3人の王様」が披露され、その上、希望者にハンドベルの「チェンジ・リング」を体験してもらいました。お子さんづれのお母さんたちが、少し練習した後の本番で見事成功したときに、童心に返った笑顔で喜びを分かち合う姿を見て、一緒に音楽をする楽しみは一瞬で人々の心を繋ぐということを改めて実感しました。

さらに嬉しかったことは、ハンドベル・リンガーズと一緒に学びを重ねてきた子どもたちの成長を感じられたことです。今回の音楽会で、リンガーズのメンバーは、J. S. バッハの「主よ、人の望みの喜びよ」の演奏と、「アマーと 3 人の王様」の朗読をしました。月に一度の限られた練習では、すみずみまで納得のいくまで、というような練習はできません。しかし、目指す表現がどのようなものなのかを感じ取り、仲間と息を合わせて一緒に演奏したり、読み合わせする姿勢が確実に身につけてきていることが、本番の演奏や朗読に現れていました。練習のときに苦労していたところも、舞台の上では素晴らしく仕上げていました。すっかり頼れる仲間となった子どもたちと、これからどんなことを共に学んでいけるのか、ますます楽しみになりました。

振り返って見ると、バッハの森での学びは、自分だけのものではなく、他者と分かち合い、共有してこそ喜びであることを深く感じます。バッハの森で共に学ぶ多くの仲間、毎週の練習やその成果を発表するコンサート、その準備を整えてくださる人たち、今はなくても以前、ここで学んでいた方々、コンサートに来てくださるお客様、偉大な音楽や絵画を残してくれた先人たち、それに感動した古今東西の人々・・・このような方々を思い浮かべると、自分が大きな世界に連なっていると思えてきます。このような諸々の方々の存在があるからこそ、自分は幸せを感じることができるのであり、自分も他の人々にとってそのような存在でありたいと、世界の平和と人々の幸福を願うクリスマスの精神に触れながら改めて思うクリスマスでした。(岩渕倫子)

仲間と一つになって 音楽する空間が大好き

バッハの森のリンガーズに参加してハンドベルを始めてから、今年は5回目のクリスマスでした。5年前に「クリスマスの音楽会」で発表した「昔、まぶねにイエスさま」の楽譜を懐かしく見返してみると、先生が分かり易く書き直してくださった楽譜の中に、私がベルを振る4か所に赤い丸がついていました。そして5年たった今年は楽譜が4頁にもなる「主よ、人の望みの喜びよ」という有名な曲を演奏しました。誰でも聴いたことがある曲ですが、途中でテンポが変わる難しい曲で、私が振るベルの数も5年前とは比べものにならないほど多くて、途中でどこを振っているのか追いつくのが大変なときもありました。でも、隣にいる先生が、いつも優しく褒めながら教えてくださるので、自分のベルの音に自信が出てきました。そして、パイプオルガンの前で振るハンドベルの音が、金色に輝いてキラキラ見えるように響いているような気がしてきました。5年前から一緒に練習してきた仲間と一つになってハンドベルを演奏している空間が、私は大好きです。

今回はハンドベルだけではなく、スライド劇「アマーと 3 人の王様」のお爺いさんカスパルと若い羊飼いの二役に挑戦しました。しゃがれ声のお爺いさんと、

はきはき話す元気な若者という正反対の年齢の二人の声を、ちゃんと語り分けるのはとても難しいことでしたが、先生がいつも台本と一緒に書いてくださるお手紙の、可愛いらしいイラスト付きのアドバイスを読んで、どこに注意したらいいか、どのようなイメージをしながら語ったらいいかを考えながらするのは、とても楽しいことでした。

何でも自分一人ではしようとすると、緊張してしまって力を発揮するのが難しいけれど、一つのことを一緒にする仲間がいると、難しいことにも挑戦してそれをやり遂げることができます。ハンドベルは一人では演奏できない楽器であり、私にとってはそういう大切な居場所なのです。これからも仲間と一つになってハンドベルを演奏し、音楽会を聴きにきてくださる大勢の皆さんに喜んでいただきたいと考えています。そして、ハンドベルの素敵な世界を皆さんにお伝えして、皆さんの中から、私もハンドベルをやってみたいという方が現れ、私たちと一緒にベルを振ってくださるようになったら嬉しいと思っています。

次の「クリスマスの音楽会」ではどんな曲を振ることになるのでしょうか。もっと楽しいクリスマスになるよう楽しみにしています。

(八田遥美、小学校4年生)



バッハの森・ハンドベル・リンガーズ



アマーと 3 人の王様

一子先生の音楽に感動し、バッハの森を残して下さったことに感謝

バッハの森には沢山の「お宝」が眠っています。中でも二階の資料室にしまわれたカセット・テープに、一子先生のオルガン演奏の録音が残されていることを知っていた私は、いつか聴きたいと願い続けてきました。今から4、5年前になるでしょうか。このプロジェクトは、そんな思いを胸に「一子先生のCDを作りたい」と友雄先生に提案したところから始まりました。けれど、カセット・テープを再生する機械すら持っていなかった私は、どう作業を進めていけばいいのかも分からず、時間だけが過ぎていきました。

そんな折り、戸部将一・慶子夫妻が、有志懇談会で皆さんに呼びかけてくださり、永らく手つかずだったプロジェクトが動き始めました。試行錯誤を重ねた後、カセット・テープではなくDATという録音媒体に残っていた録音データを活用することになりました。

CDに収める曲の候補を選ぶため、DATから取り込んだ一子先生の録音データを聴いている時間は、とても幸せでした。「歌うように」演奏されるオルガンのコーラル旋律は、息づかいまで見事に伝わってきます。テーマは「クリスマス」と決まり、私が集めた候補曲の中から比留間恵さんと友雄先生が曲を選別し、さらに60分に収まるよう、恵さんがプログラムを組み立てました。出来上がったプログラムは、バッハの森のコンサートのように、ハンドベルの点鐘が始まって、オルガン演奏、合唱、聖書朗読、ハンドベル、コーラル斉唱と進行していくもので、決してオルガン演奏だけではありません。生前、自分のオルガン演奏のCDを作ることに積極的でなかった一子先生も、このような形なら喜んでくださるはずだと考えました。最後は比留間伸行さんが幾たびか調整を重ねて、CDが完成されました。

今年1月8日、午後2時30分、バッハの森記念奏楽堂の入り口に置かれたクリスマスの飾りが温かく迎える中、「バッハの森記念奏楽堂で一子先生と奏でたクリスマス」再生CD鑑賞会が開かれました。2000年から2005年のクリスマス・コンサートのライブです。どうしても今回は都合がつかないと断ってこられた方々も数名おられました。最近、バッハの森の活動に常時参加なさっている方々の他に、遠方に住んでおられるため普段は参加されない方も駆けつけてくださいました。参加者は全員で17名でした。

プログラムは、アドヴェント、受胎告知とマニフィカト、降誕の三部構成となっていました。第一部では、ラテン語の聖歌“Veni Redemptor gentium”「来たりたまえ、異邦人の贖い主よ」の男声朗読に続いて、J. S. バッハの“Nun komm, der Heiden Heiland” (BWV 659)「いざ来たりたまえ、異邦人の救い主よ」のオルガン曲が奏楽堂を包みます。クリスマス・コンサートを、しばしばこの曲で幕を開けた一子先生のレパートリー中のレパートリーです。一子先生の心と体が一体となって奏でられているようで音楽と先生との境目がもはや存在しないような感覚を覚えました。

第二部は、天使がマリアに「受胎告知」をした箇所

の聖書の朗読で始まり、L. C. ダカンのノエル10番「気高き心の若き処女」の美しいオルガン曲が続きました。そしてJ. H. シャインの「わが魂は主をあがめ」のクワイアの朗読とS. シャイトのオルガン曲「マニフィカト 第9旋法」が交互に演奏されると、一子先生と一緒に練習した日々がまざまざと思い出されました。歌とオルガンが見事に響き合い、呼吸し合っていることに驚きました。息づかいが全く一緒なのです。

第三部「降誕」でクライマックスに達します。D. ブクステフーデの“Puer natus in Bethlehem”「みどり児、生まれぬ、ベツレヘムに」により、オルガンが静かに降誕の情景を物語り、続く合唱は、時に迫り来る嵐のように、時に陽光の中から溢れ出す光の粒のように、幼な子の誕生の喜びや驚き、そして安堵を雄弁に伝えます。その後で会衆が第8節「み子生まれたもう喜びの日」をオルガン伴奏と共に歌いだすと、CD鑑賞に集まった私たちも皆、斉唱に参加しました。一子先生のオルガン伴奏で歌う久しぶりの喜びに、前奏に続いて歌いだすやいなや、胸も心も鼻も全部つまってしまい、いたたまれなくなった私は、奏楽堂から退席せざるをえませんでした。

その瞬間、はっきり分かったことがありました。それは一子先生がいかにバッハの森を支えてきて下さったかということです。感謝と申し訳なさ、それに大きな喜びが混ざり合った強い思いが、心にどっと押し寄せてきたのです。一子先生が亡くなってからはや13年たちましたが、オルガンを練習した後で奏楽堂を出るとき、出口の一子先生の写真に一礼するのが習慣になっています。そのとき一子先生と「会った」気分になるだけではなく、バッハの森にいるときは、しばしば一子先生の存在を感じています。でもこの時ほど一子先生の存在が「分かった」のは初めてでした。

一子先生との出会いは今から20年以上前のことになります。先生は、バッハの森のすべてのプログラムに、「教える」と「共に学ぶ」の二刀流で参加なさるエネルギーのある方でした。そして集まったメンバーを茶目っ気のあるおしゃべりで楽しませ、気遣ってくださるだけではなく、お庭に咲く可愛い花の面倒を熱心にみていらっしやいました。しょっちゅう「お尻に火がついているわ」とか「自転車操業なの」と忙しい毎日を笑い飛ばしていらしたお姿が、今でもありありと目に浮かびます。

この歳になり、家庭を持ち、なにがしかの仕事を抱える今、一子先生の毎日がどんなに大変であったか、想像に余りあります。時には骨身を削ってこなさなければならなかったそのご負担の大きさがいかほどのものであったか、その事実で改めて頭を垂れる思いです。けれども、それは一子先生の喜びであり、誰かに頼まれたから行うのではなく、心の底から尽きることなく溢れ続ける音楽への愛、バッハの森に集うメンバーへの愛情と使命感だったのだと、今になって分かります。私財を投じ、オルガンを中心とする音楽文化の素晴らしさを分かち合うためにオルガニストとして音楽に通じる全ての学びを支え導くこと。それをなさったのが一子先生でした。CD鑑賞会の後、奏楽堂で椅子を丸く並べ変えて、参加した皆さんと感想を伝え合いました。「一子先生との思い出がよみがえってき

ました」、「オルガンが全てを包んでくれるような温かい演奏で、本当に感動しました」、「オルガンのきれいな音で、戦後何もなかった当時の乾いた日本に、すばらしものをもたらしてくださったことを改めて感じました」などと、時には声を詰まらせながらのコメントも多くありました。これらの感想を聞きながら、強く感じたことはこの CD 鑑賞会を通じて皆さんにとって一子先生がどのような存在だったかを、これまで以上に「分かった」のかもしれないということでした。心に響くオルガンの演奏の中に、それぞれの一子先生が生きていて、改めてその一子先生に再会したとも言えるかもしれません。

CD 鑑賞会の最後に、“In dulci jubilo”「甘き喜びのうち」を一子先生のオルガン伴奏とともに皆で斉唱しました。その4節の歌詞に「喜びいずこ、かしこの他に、我ら歌う、新たな歌を」とあります。恵さんが指摘なさっていましたが、この「新たな歌」には、沢山の意味を見いだせそうです。でもまずは、ここにこうして集い、新年に「新たな歌」を歌えるバッハの森を守り、残してくださった一子先生に、心から感謝したいと思います。(別所香苗)



バッハの森・クワイア



祝会・ピニャータ割り



子どもたちのハンドベル試し振り



バッハの森・器楽アンサンブル



幼な児を拝むマギ (3人の博士)

日誌 (2021. 10. 1~12. 31)

*R: オンライン参加

10. 1 **休会** 台風のため「コラール研究会」休会。
10. 2 **運営委員会** 参加者 6 名 (R2)。
11. 6 **運営委員会** 参加者 5 名 (R2)。
11. 20 **粗大ゴミ搬出** 2 名。
11. 24~27 **庭木剪定、枯れ葉処分** 鈴木造園。
12. 3 **朝のオルガン音楽鑑賞会**
参加者 28 名 (26 名+演奏者、講師)。
12. 4 **運営委員会** 参加者 6 名 (R2)。
12. 12 **クリスマス・コンサート**
参加者 35 名 (18 名+演奏者 14 名+受付 3 名)。
12. 18 **クリスマスの音楽会**
参加者 55 名 (35 名+演奏者 15 名+受付 5 名)。
クリスマス祝会 参加者 16 名。
12. 26~2022.1.5 **冬期休館**

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラールを楽しもう/カンタータ入門 (JSB)

10. 2 コラール「われ呼ぶ、主イエスよ」、オルガン：
笠間きよ子。参加者 9 名。
10. 9 **第 481 回**、三位一体後第 4 主日「私はあなたに呼
びかけます、主イエス・キリストよ」(BWV 177)；
オルガン：J. S. バッハ「同名」(BWV 639) 笠間
きよ子。参加者 8 名。
10. 16 コラール「取り除きたまえ」、オルガン：安西
文子。参加者 7 名。
10. 23 **第 482 回**、三位一体後第 10 主日「私たちより取り
去ってください、主よ、誠なる神よ」(BWV 101)；
オルガン：D. ブクステフーデ「同名」(BuxWV
207) 安西文子。参加者 11 名。
10. 30 コラール「こは聖き十の主の戒めなり」、オルガ
ン：別所香苗。参加者 7 名。
11. 6 **第 483 回**、三位一体後第 13 主日「お前はお前の主
なる神を愛さなければならぬ」(BWV 77)；オル
ガン：J. S. バッハ「これは聖なる十戒である」
(BWV 679)；別所香苗。参加者 9 名。
11. 13 コラール「深き悩みより」、オルガン：安西文子。
参加者 10 名。
11. 20 **第 484 回**、三位一体後第 21 主日「深い悩みより私
はあなたに向かって叫びます」(BWV 38)；オルガ
ン：J. S. バッハ「同名」(BWV 687)、安西文子。
参加者 7 名。
11. 27、12. 4 **第 485 回**、三位一体後第 26 主日「目覚めよ、
祈れ、祈れ、目覚めよ」(BWV 70)；オルガン：G.
バーム「大いに喜べ、おお私の魂よ」、横田博子。
参加者 9 名、9 名。

学習コース

- バッハの森クワイア** 10. 2/12 名、10. 9/13 名、
10. 16/14 名、10. 23/15 名、10. 30/15 名、

11. 6/14 名、11. 13/14 名、11. 20/13 名、
11. 27/13 名、12. 11/14 名 (ゲネプロ)。
オルガン音楽研究会 10. 1/6 名、10. 15/8 名、
10. 29/10 名、11. 12/9 名。
コラール研究会 10. 15/6 名、10. 29/6 名、11. 12
/3 名。
オルガン・クラヴィコード レッスン & クリニック
10. 15/2 名、
オルガン・クラブ 10. 8/2 名、10. 22/4 名、11. 5
/4 名、11. 19/4 名。
聖書入門 10. 2/5 名 (R3)、10. 9/5 名 (R3)、
10. 16/5 名 (R2)、10. 23/6 名 (R2)、10. 30
/5 名 (R4)、11. 6/7 名 (R2)、11. 13/4 名
(R3)、11. 20/4 名 (R3)、11. 27/5 名 (R6)、
12. 4/6 名 (R3)、12. 11/6 名 (R3)。
器楽アンサンブル 10. 9/4 名、10. 23/4 名、11. 20
/4 名、12. 4/4 名。
ハンドベル・クワイア 10. 16/5 名、10. 30/5 名、
11. 13/4 名、11. 27/4 名。
ハンドベル・リンガーズ 10. 17/8 名、11. 21/8 名
+朗読 7 名、12. 5/6 名+朗読 5 名。
オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
10. 1/1 名、10. 2/2 名、10. 5/2 名、10. 6/2 名、
10. 7/3 名、10. 8/5 名、10. 9/3 名、10. 12/3 名、
10. 14/3 名、10. 15/4 名、10. 16/3 名、10. 17/
1 名、10. 19/1 名、10. 20/1 名、10. 21/2 名、
10. 22/5 名、10. 23/3 名、10. 26/2 名、10. 28/
4 名、10. 29/3 名、10. 30/2 名、11. 2/3 名、11. 4
/2 名、11. 5/4 名、11. 6/3 名、11. 7/1 名、11. 9
/3 名、11. 11/3 名、11. 12/2 名、11. 13/2 名、
11. 15/1 名、11. 16/1 名、11. 17/1 名、11. 18/
1 名、11. 19/3 名、11. 20/3 名、11. 24/4 名、
11. 25/2 名、11. 26/1 名、11. 27/3 名、11. 30/
3 名、12. 1/2 名、12. 2/2 名、12. 3/3 名、12. 4
/3 名、12. 7/2 名、12. 8/1 名、12. 9/2 名、
12. 11/1 名、12. 15/2 名、12. 17/2 名、12. 22/
1 名。

寄付者芳名 (2021. 9. 1~12. 31)

建物維持積立寄付

下記の方々から計 22,000 円のご寄付をいただきました。

オルガン修理積立寄付

下記の方々から計 6,000 円のご寄付をいただきました。

一般寄付

下記の方々から計 129,000 円のご寄付をいただきました。